

京都大学	博士(文学)	氏名	村 田 み お
論文題目	中國中古の實踐佛教		
(論文内容の要旨) 中國中古(魏晉南北朝隋唐)佛教研究において、今取り組むべき課題は何だろうか。それは、社會的階層や宗派等の枠組みによって斷片化された研究から脱却することだと考える。研究史を概括すると、おおよそ二十世紀前半は、中國思想史では特に注釋書や論書を中心とした佛教受容及び三教論争の研究、中國佛教史では特に各王朝における興亡史、及び唐宋の視點から遡って見た宗派の形成史の研究に重點が置かれてきた。いずれの場合も教理學的・史學的研究が主流となり、三教・宗派・王朝に區切られた研究が大勢を占めていたのである。このような状況が出來した一因は資料的制約にあった。 その後、二十世紀後半に入ると敦煌寫本の研究が深まり、資料的状況に大きな變化が生じた。特に近年、石刻資料や敦煌・トルファンの出土資料、及び日本の古寫本の整理・公開が進み、『敦煌祕笈』(二〇〇九)等の圖版の他にも、例えば IDP (國際敦煌プロジェクト) がウェブ上で公開するといったことにより、新出資料を用いた研究が活況を呈している。しかし新出資料の研究もやはり既存の路線に沿い、各資料を分析して從來の枠組みへと分類・歸屬させる傾向が続いている。 先行研究において主流であった教理學的・史學的研究は、知識人による教理上の論争、皇帝による擁護・彈壓といった、ごく一握りの層に焦點を當てる傾向が強く、宗派・王朝等の枠組みの中では研究を大きく深化させてきたが、時代全體を連續的に捉える視野が不足していた。また近年進む新出資料の整理・公開と利便性の向上により、從來の資料的制約は打破しうると期待できるものの、唐代寫本が相當數殘存する反面、六朝期、特に南朝の寫本は信賴しうる傳存作例が極めて僅少であり、資料不足を全面的に補うことはできない。このような問題を解決するために、次の三點によるアプローチが有効であると考ええる。 一、禪定・捨身・寫經などの實踐方法、その思想的構造を解明する 限られた層を對象とした斷片的研究から脱却する鍵となるのは、時代・王朝を横斷してより廣い層によって行われた實踐修行に目を向けることである。近年では例えば諏訪義純氏 (『中國南朝佛教史の研究』、法藏館、一九九八)、船山徹氏 (「六朝時代における菩薩戒の受容過程」、『東方學報』京都第六七冊、一九九五) による六朝期を中心とした戒律の研究があるが、さらに禪定・捨身・寫經といった角度から検討を進めることが必須である。 二、中國古來の傳統思想及び道教思想の中から關連・近似する要素を導き出す			

従來の佛教受容や三教論争の研究は、一見すると儒・佛・道の思想を包括して論じているかのようである。しかし多くの場合、佛教受容については「中國化」や「誤解」、また三教論争については各派の對立という構圖が基調とされ、連續的視野の獲得を難しくさせている。そこで中國傳統思想・道教思想から關連・近似する要素を抽出し、それらが佛教思想と如何に融合したか、という觀點から考察する。

三、佛教文獻全體を活用し、かつ他分野の資料をも収集する

これまで研究對象の主流であった注釋書・論争書や、新出資料のみに依っていると、特に六朝期の研究が疎かにされがちになり、また一、二のアプローチを實現することが困難である。従って、佛教文獻内では目錄書、類書、總集、僧傳、靈驗記といった、従來は往々にして補助的材料とされていた文獻を活用するとともに、佛教文獻以外の歴史書や書畫論といった他分野の資料をも収集することが不可欠である。

これらの視點を基調として行つた研究が、この『中國中古の實踐佛教』である。實踐修行及び中國傳統思想・道教思想との關連の解明によって、従來は斷片化されがちであった中古の佛教を一つの流れとして把握することが、本研究の大きな目的である。そこで具體的には、禪定の中で佛の姿を觀するという觀念念佛と、現代日本においても馴染みのある寫經を取りあげた。本研究は全五章からなり、第一章は觀念念佛、第二章から第五章は寫經の角度からの考察である。時代的には東晉から唐末までを主たる考察の對象とし、一部で日本の奈良・平安期についても論及する。

第一章「佛教圖像と山水畫—廬山慧遠「佛影銘」と宗炳「畫山水序」をめぐって—」では、東晉の名僧である慧遠と弟子の宗炳については、従來の研究では儒佛論争での影響關係の検討に終始していた。そこで本章では宗炳の山水畫論を活用し、實踐修行である觀念念佛が中國傳統の感應の思想によって支えられ、その構造が宗炳の山水畫鑑賞・制作論の中に組み込まれていることを明らかにした。

そもそものは現在のアフガニスタン東部にあるナガラハーラに釋迦が姿を壁に残したという佛影窟が存在し、その話を耳にした慧遠が、それに模して佛影を描いた龕室を廬山に造營した。慧遠「佛影銘」やその他の禪定に關する記述から明らかにしたように、慧遠とその周邊の人々による觀念念佛の實修は、中國古來の思想である「感應」に支えられており、實修の際には佛陀の圖像が應現を引き起こす端緒の役割を果たした。このような修行は、弟子である宗炳によって東晉期廬山から劉宋期荊州へと伝えられ、さらには孫の宗測にも受け繼がれ、齊梁期荊州佛教の形成を促した。また、宗炳は山水を淨土とオーヴァーラップさせ、山水をも觀念念佛の修行の場とみなしていた。宗炳の山水畫論に見られる制作論・觀賞論は、觀念念佛の構造を取りいれ理論化したものであり、このことは彼の思想の融和性の高さを表していると言える。

本研究の中ではこの第一章が最も早い時期を取り扱う。南朝に焦點を當て、地域的には廬山から荊州、時期的には東晉から梁の間の連續性を、觀念念佛の繼承、及び畫論への展開によって解明した。

第二章「六朝隋唐期の佛典書寫をめぐる思想的考察」からは寫經をテーマとし、まず大乘經典中の寫經に関する記述と、六朝隋唐期の僧傳・靈驗記類に見られる逸話を用いて、中古全體を通貫する思想的基調を明らかにした。

大乘經典の中で寫經は功德を積むための重要な修行とされ、特に『法華經』に明瞭なように、書寫された經卷は供養・崇拜の對象とされた。また經卷を書寫して人に與えることは法施と位置づけられた。この思想をもとにして、六朝隋唐期においては、寫經の功德による病氣・地獄等の苦しみからの救済、及び聖性を備えた經卷による火災・水難時の奇跡の逸話等が多数生み出されたのである。經典寫本による救済・奇跡の發現は、經典が本來備える聖典としての地位に加えて、書寫・受持する者の心身兩面の清淨性を根據とする。精神面では「感應」思想に基づいて強く純粹な誓願が重視され、肉體面では齋戒沐浴、香の多用、書寫専用の場・道具が要求された。このようなメカニズムによって物神崇拜の如く經卷を神聖化する思想は、さらに儒教經典『孝經』にも波及していた。

本章は第三章から第五章、及び今後の研究のための基礎となる一章である。敦煌寫本の壓倒的多數を占めるのは佛典寫本であり、それらが當時の思想的文脈の中で有していた意味を明確に論證する本論文は、個別の寫本を對象とする研究にバックグラウンドを提供するものでもある。

第三章「金字經の思想的系譜―中國六朝期から日本平安期まで―」では通常の紙墨とは異なる些か特殊な形態の經卷、金字經（金泥で書寫した經卷）を取りあげた。從來金字經は日本の作例を中心として日本美術史、日本佛教史等の中で取り扱われ、日本に先立って中國で作成が開始されていたことや、その思想的意味づけの展開についてはまとまった考察がなされてこなかった。そこで本章は、北魏から梁・陳・隋、そして日本の奈良・平安期に到る視野のもとで考察した。

文獻上で確認できる限りでは、金字經作成の歴史は北魏宗室に始まる。そもそもは聖典や王侯に相應しい装飾であったが、その後、梁武帝蕭衍が金經による講義を行い、『般若經』中の薩陀波崙、曇無竭の本生譚を再現するという意味を附與した。さらに南嶽慧思は末法思想と彌勒信仰の高まりの中で、蕭衍の意圖を繼承しつつ、中國傳統の金玉のイメージを淵源として、石經と同じ佛法不滅の象徴の意義をも與え、智顗へと繼承させたのである。この繼承關係は、都における皇帝の行爲が、當時南北朝の境界近くに在った慧思によって展開し、後には南嶽衡山と天台山に伝えられたことを意味する。そして隋唐以後、中國において金字經が作られ續けた一方で、日本でも少なくとも聖武天皇の時には金字經作成が始まった。また鑑眞、最澄によって中國作成の金字經がもたらされた。慧思によって附與された不滅の經卷という意味づけが日本にも繼承されたことは、末法思想が興隆した平安期、經塚の流行の中で金字經が埋納され、願文に彌勒出世の願いが記されている點から明らかである。經塚の最初の例である藤原道長には、中國天台と日本天台を介した慧思の思想の直接的影響が考えられる。

以上のように、本章では金字經が本來備えていた様々な思想的意味を解明して、豊かなイメージを附與された經卷であったことを明らかにし、單なる煌びやかな裝飾經と捉えていた従來の認識を塗り替えた。

第四章「血字經の淵源と意義」では、もう一種類の特殊形態である血字經（血液で書寫した經卷）に注目し、それが如何なる思想的な淵源と意義を有していたのかを、ジョン・キーシュニック “Blood Writing in Chinese Buddhism”（二〇〇〇）を代表とする先行研究を踏まえて考察した。

血液による寫經には、肉體の痛みに耐える苦行・肉體の一部を捧げる捨身という基本的意義があるのに加えて、血字經が中國中世において實踐された背景には、實は當時流行していた本生譚の影響が大きい。先行研究では血字經を説く經典の中で『梵網經』を最も有力な出典とする見解が主流であった。しかし『梵網經』及び『梵網經』が基ついた『大般涅槃經』以外の經論、すなわち『大智度論』、『賢愚經』等では、全て同一の筋書の本生譚の中で血字經を説いている。また血字經に言及する記事の検討によって、それらが血字經を本生譚と捉えて記述していたことが明らかである。第三章で論じた『般若經』中の本生譚の再現と同様に、血字經の實踐には釋迦の前世の行いを模倣するという意圖があったと考えられる。また中國古來の傳統として、血は誠意・忠心を象徴しており、書寫者の發願の眞實性を増すことにつながる。そして服喪時の追善寫經としての血經作成には、父母への孝心を表す「哀毀」（死者への哀悼の余り肉體を衰弱させる）の傳統が融合している。

以上のように、先行研究が典據として挙げた經論の遺漏及び位置づけの問題に関して補足と補正を行い、血字經の作成が本生譚の模倣であったことを論證した。また思想的意味づけについても、誠意と孝という中國古來の思想との關連を明らかにした。

第五章「寫本時代における原稿と定本の境界 —「正書」、「正字」を中心に—」では、第二章から第四章の思想的研究とは角度を変え、最後に本章で文獻學的側面について考察を行った。寫本時代における書物の作成過程は如何なるものだったのか、當時における「書物」と非「書物」の境界線は何處にあったのか、という問題をめぐって、佛典書寫に關する様々な資料を用いて、書體・字體の規範意識を中心に考察していく。

「正書」、「正字」を主たるキーワードとして、寫本の作成過程が彼らの意識の中でどのように段階づけられていたのかを検討し、印刷という基準では計り得ない時代の「書物」の概念の一端をあぶり出すことを目的とした。

經典翻譯の過程において、草稿ができた後に行われる「正書」は下書きから定本への變わり目となる。書體名としての「正書」はくずし書きの草書に對して正しく規範的な書體を意味する。いずれの場合も「正」は「草」の持つ初歩的で粗略なものという意味と對立し、内容と書體の兩面を整えて完成させることを意味する。「正書」とは、不特定多數に流布させるための公的な書體であり、現代の印刷物の書體に相當するものと定義し得る。佛教、道教のいずれにおいても、「正書」に熟達することは寫經と強

く結びついていた。そして佛教文獻における草書の使用は、佛法を滅亡に導くものとして厳しく禁じられた。また字體の面でも「正」が求められ、「正字」という職が設けられ、依據すべき標準となる字體としての「正字」が定められた。「正書」が原稿と定稿の境となるように、異體字と俗字を排除して「正字」で書寫することも一つの境界線を成す。書體・字體の「正」は寫本時代の書物にとっての重要な轉換點であった。校正や推敲中に寫しが流出した事例からは、草稿と定稿の明瞭な區別の意識と、著者による不認可と認可という作者としての自我意識を見てとることができる。寫本時代には草稿も定本も手書きであり、手書きと印刷のような大きな斷絶はない。そこで兩者の差異を明瞭にする指標となったのが「正書」と「正字」であった。譯者、著者として納得し得る完成した定本を作り、それを「正字」で「正書」することによって、原稿は書物へと變貌したのである。

(論文審査の結果の要旨)

これまでの魏晉南北朝隋唐期の佛教研究は、教理學的・史學的研究が主流であり、三教・宗派・王朝に區切られた研究が大勢を占めるなか、著者は時代を連續的に捉えようという観点から、佛教における實踐、とりわけ觀佛と寫經という二點に注目して考察を行い、近年の新出土資料や古寫本の整理が進んでいるという研究環境を最大限に利用しつつ、中國佛教研究に新たな一面を切り開こうとする意欲作である。

本研究の重要な點は、上記のような廣い視野をもつことのみならず、第一に、中國思想史というベースをもとに佛教の實踐を中國思想史の中に位置づけようと試みていること、第二に、従來は美術史において單なる裝飾と見られることが多かった金字等の寫經について、思想史の中での意味を見いだしたことにある。これは、本研究が、中國佛教研究にとどまらず、中國思想史、さらには日本・東洋美術史にとっても重要な知見を示したという點で特記すべきことである。

本研究は五章よりなる。佛教の實踐のうち、觀佛をテーマとする第一章、寫經を扱う第二章以下に大きく分けられるが、順次各章の内容を概観しておく。

第一章では、宗炳の山水畫論を検討し、實踐修行である觀念念佛が中國傳統の感應の思想によって支えられ、その構造が宗炳の山水畫鑑賞・制作論の中に組み込まれていることを明らかにする。實修の際には佛陀の圖像が應現を引き起こす端緒の役割を果たし、このような修行が、東晉期廬山から劉宋期荊州へと傳えられ、さらに齊梁期荊州佛教の形成を促したことを明らかにする。佛教史に對する新たな知見を示したのみならず、山水畫理論史にも一石を投じる貴重な指摘を含む。

第二章では、大乘經典の中で寫經は功德を積むための重要な修行とされ、特に『法華經』に明瞭なように、書寫された經卷は供養・崇拜の對象とされ、經卷を書寫して人に與えることが法施と位置づけられたことを確認し、この思想をもとにして、六朝隋唐期においては、寫經の功德による病氣・地獄等の苦しみからの救濟、及び聖性を備えた經卷による火災・水難時の奇跡の逸話等が多數生み出されたこと、經典寫本による救濟・奇跡の發現は、經典が本來備える聖典としての地位に加えて、書寫・受持する者の心身兩面の清淨性を根據とすることを明らかにする。

第三章では、通常の紙墨とは異なる些か特殊な形態の經卷、金字經（金泥で書寫した經卷）を取りあげる。従來金字經は日本の作例を中心に日本美術史・佛教史等の中で取り扱われ、日本に先立って中國で作成が開始されていたことや、その思想的意味づけについてはまとまった考察がなされてこなかったが、本研究は、金字經作成の歴史が北魏宗室に始まり、そもそもは聖典や王侯に相應しい裝飾であったが、その後、梁武帝蕭衍が金字經による講義を行い、『般若經』中の本生譚を再現するという意味を附與し、さらに南嶽慧思が末法思想と彌勒信仰の高まりの中で、蕭衍の意圖を繼承しつつ、中國傳統の金や玉のイメージを淵源として、石經と同じく佛法不滅の象徴の意義をも與え、智顗へと繼承させたということを明らかにする。本章は本研究の中でも

特に重要な意義をもつ章であり、今後の寫經研究、あるいは美術史研究に對してとりわけ大きな寄与をなした部分だと評價できる。

第四章では、もう一種類の特殊形態である血字經(血液で書寫した經卷)に注目し、それが如何なる思想的な淵源と意義を有していたのかを考察する。血液による寫經には、捨身という基本的意義があるのに加えて、實は當時流行していた本生譚の影響が大きく、第三章で論じた『般若經』中の本生譚の再現と同様に、血字經の實踐には釋迦の前世の行いを模倣するという意圖があったことを明らかにする。またこれは中國古來の傳統として、血は誠意・忠心を象徴しており、書寫者の發願の眞實性を増すことにつながり、服喪時の追善寫經としての血字經作成には、父母への孝心を表す「哀毀」の傳統が融合していることも指摘している。

第五章では、佛典書寫に關する様々な資料を用いて、書體・字體の規範意識を中心に、「正書」、「正字」を主たるキーワードとして、寫本の作成過程が彼らの意識の中でどのように段階づけられていたのかを検討し、印刷という基準では計り得ない時代の「書物」の概念の一端を明らかにしている。

また、論文の最後には、附録として「佛教文獻書寫關連資料集」がつけられ、これは著者が『高僧傳』、『續高僧傳』、『宋高僧傳』、さらに『弘明集』や『廣弘明集』などを通讀したときの副産物であり、極めて有用な資料集となっていることも付け加えておく。

以上、本研究は思想史を自らの研究のベースに持つ著者ならではのものであり、また現今のデータベース隆盛の時代にあつて、丹念に佛教文獻を讀み進めた著者の努力の結果として、創見に満ち、かつ着實なものとなっており、論文全體を通じて、原典資料を可能な限り正確かつ緻密に讀解しようとする態度に溢れ、それを高水準で實現していると評價できる。

ただし、いくつか氣になるところはある。まず、題名に實踐佛教とうたいながら、考察された對象が限られていること、また、寫經の研究を「佛教」側から明らかにしようとしたのが大きな功績であることは認められるが、逆に金銅佛などの金を使った別の存在にほとんど觸れられていないこと、金泥寫經に込められた不滅性の象徴的意義を述べながら、一方で同類の意識が働く石刻經典との共通性や違いが必ずしも十分検討されなかったことなどがあげられる。

しかしながら、それは著者のこれからの研究の進捗によって解決されていく問題だと思われ、本論文の價値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文學)の學位論文として價値あるものと認められる。なお、2013年2月22日、調査委員三名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。